



中舞鶴の歴史・くらし探検隊 活動ニュース

第3号

発行 平成27年8月20日

編集 中央公民館

舞鶴市字余部下1167

舞鶴湾の要衝、風光明媚の地 基地整備（明治、昭和）で大規模買収、村の消滅も

“第2回探検、長浜地区

「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」（27年度中央公民館事業）では、第2回“探検”を7月19日に長浜地区で実施しました。車に乗り合わせ、京都大学水産実験所前や保安学校正門付近、高倉神社、加津良地区などを巡りました。今回の参加者は13人。概要を報告します。

高倉神社

拝殿に文化財の陳列室
境内には記念碑や植樹も



中舞鶴の各町内が氏子となっている高倉神社。古くは、現在地の裏山の上に鎮座していたのを付近を船で航行するものが神威を畏れて現在地に遷座したと伝える

の陳列室。狛犬などたくさん
の文化財が展示されている



▲市指定文化財の狛犬
慶長18年（1613）作陶



▲神像や太刀なども



▲新旧五森・長浜・加津良・和田の俯瞰図（拝殿内に展示）



▲境内にある五ツ森神社。五森の地名を伝える



▲当日は氏子総代の佐藤会長、生田副会長に案内をお世話になりました



神石(鞍掛石) 元裏山近くの海岸にあったものを軍施設の拡張で一部を現在の場所に移転したと伝える



有栖川宮熾仁親王の参拝記念碑(明治25年建立) 明治22年、軍港予定地視察のため訪れたと記す。



鬼瓦が語る… 北吸も下安久も氏子だったんだ!

弘化2年(1845)、6か村(下安久、北吸、長浜、和田、余部下、余部上)の氏子により建立された籠屋の鬼瓦(左端は拝殿に展示、左隣は境内に展示)。平成元年の籠屋の復元事業施工に当たり、瓦の一部は日本の鬼瓦を保存する会(大江町)に寄贈したとある。

鬼瓦の横に置かれた妖怪のような面は何? (写真上)
→節分行事で使われる鬼の面

集落の移転

鎮守府設置決定(明治22年)後の買収、基地拡張(昭和10年代)による立ち退き — 集落が消える!



保安学校正門近くの「五森の碑」。五森の由来や当時の地図が記されている。五森地区は、昭和13年、海軍用地として収用。全13戸が立ち退きを余儀なくされ加津良へ移転。



碑に刻まれた五森の俯瞰図。井本隊員のお母さんの実家(井本治右衛門)もわかる。



京都大学水産実験所前。軍施設拡張で付近一帯の集落が移転。移転先は、中舞鶴地区一円?に。道芝地区では、7、8軒ほどが移り住まれているという。実験所正門西側近くにあった十二月栗(しわすくり)神社は、高倉神社へ移転している。

立江地蔵も移転



五森の牛渡しにあった立江(たちえ)地蔵。集落の移転と同時期に加津良峠の現在地に。(写真左の2枚。祠とそれを覆う上屋)。

同名の立江寺は四国八十八箇所第19番札所(徳島県小松島市)

加津良の街並み



加津良地区の地図「中舞鶴町略図」(大正8年~昭和13年ころの発行)から



加津良稲荷・・・東郷さんの思いが伝わる？

現在の加津良地区(写真上、右上)。遊郭は明治38年開業、しかし昭和18年には海軍の命令で全家屋が明け渡されたようだ

長浜温泉・・・

鎮守府設置以降の余部の成功者・飯野寅吉が多額の財を投じて建設した長浜温泉及び料亭の写真(明治44年発行の冊子「新興の舞鶴」に紹介されている)



長浜の料亭及温泉旅館長浜温泉の飯野寅吉新築

写真上は、長浜温泉及び料亭の写真「新興の舞鶴」(明治44年10月5日発行より)。写真左は長浜温泉があったと思われる長浜付近



探検隊の旗できる

旗のマークは、旧中舞鶴町の町章(第四鎮守府を意味する4つの錨を象る)を模したもの。旗は探検隊の藤川隊長作成。



竹に黄金色の縞模様 天然記念物に匹敵？

加津良峠付近で、黄金色の縞の入った孟宗竹が発見されている。宮崎県北川町や福岡県久留米市では国の天然記念物に指定。突然変異で発生するらしく、西日本では数か所しか見つかっていない珍しいもの。



大区画の墓地。五森では集落の移転にあわせて墓地も移転する必要があった。歴史を刻む墓石を運ぶのは大変だったはず。

桜にヤニがいっぱい！

調べてみると・・・サクラは自分の身を守るために「ヤニ」(松ヤニのようなもの)を出します。昔はチューインガムの代用として、かんでいたとのこと。



【お断りとお願い】掲載内容については、今後の探検活動の中で、追記・修正等を行う予定。後日、活動成果を取りまとめた展示を中央公民館で開催する計画です。掲載内容に関連する情報提供をお願いします。

第2回探検の感想

▽中舞鶴は海軍の影響で栄えていったところもあるけれど、村の立ち退きや移転という犠牲もたくさんあったのだと、実際に跡地をみて感じました。今回は遠くだったのでマイカーで移動しましたが、加津良、長浜、和田、余部下それぞれの地域をゆっくりと回り、昔の暮らしの生活跡などをみてみたいです。

▽今回巡った五森集落が、海軍基地の建設で移転を余儀なくされたところについて、海軍ができる前と比較できる古地図があるとよいな～と思いました。また移転をめぐる経緯などの話も聞きたいと思いました。

▽高倉神社にもいろいろな文化財があり、興味深く拝観させてもらいましたが、それらについての説明の機会があればもっと知識が広がると思います。

▽探検隊なので、何か発見・発掘(掘るのではなく、埋もれていたものを掘り起こす)をテーマにしたらどうか・・・

①消えた○○シリーズが・・・

②江上家、布川家等を含め、中舞鶴のお宝発見など(文化財だけでなく、諸々の所、伝説・話なども)も面白いなあ～と思いました。

▽私にとっては、先々で「へえ～」「なるほど～」の連発でしたが、結局はすでに誰かが調べていたり、資料が残っていたりというものであって、探検と言うよりは、整備(整理)されたものを見る観光であった感じがしました。解ったことより、解らなかったことを「その先を探しています」とか、「その訳を探しています」とか地域の人に問う形の探検もありではないでしょうか？

▽長浜温泉は私の生涯の関心事になりました。

中舞鶴の地名を考える ～餘部の古代 その②～

◆「あま」についての考察

◇5部族の中の蛇族に分類され、農耕民族が蛇を崇拝したのに対して、その延長線上の創造物である竜をトータルとする集団が多かった。尚、蛇族は南洋から渡来したため、南族、南加(原南洋人)とも表現された。その代表的部族に古代インドにナーガ族と呼ばれる蛇族がいた。

cf 成生岬→南竜岬 長浜→ナーガ浜 中田→南加田

◇日本語アマの語源

シュメール語の「海」a-ab-ba(あ-あぶ-ば)から鼻音代償のb→m転訛しただけの語形が、日本語の「海」

のa-am-ma~amaアマであり、世界で最も「海」の語源に近いといえる。

◇漢字表現された「あま」についての考察

代表的表現として(1)海部(2)海士(3)余(4)天(5)甘の5種類があるが(4)と(5)のあまは同音衝突で日神月神を意味する。(1)の海部は船員を意味し、物資の運搬や戦闘を生業とした人達であり、(2)の海士は一般的なあまで漁民を表す。では(3)のあまとはどういう人達を表そうとしたのであろうか。そして(1)の海部との違いは？そもそも『余』はあまると読み、この「る」は古代語の助詞の「の」であり、本来の意味は海部の、という意味である。実はこの場合のあまは海部知男命(あまべしるおのみこと)のことであり、従って餘部とは海部知男命の民という意味になる。縄文後期九州を中心とした千年王国「東表国」(とうびょうこく)の王こそが海部知男命(クリタシロス)なのであった。

(井本精一)